第22回国際栄養学会議（ICN2022）参加レポート
ーコングレス＆HPSC教育ツアーー

嶋　津　裕　子[1]

要　　約

本稿では、2022年12月6日（火）～12月11日（日）までの6日間にわたり、東京国際フォーラム（東京都千代田区）で開催された第22回国際栄養学会議（ICN2022）に参加した報告を行う。今回のICN2022は、「栄養の力：100億人の笑顔のために（THE POWER OF NUTRITION :FOR THE SMILES OF 10 BILLION PEOPLE）」をテーマとして開催された。特別シンポジウムは、東京サミット後の進捗状況を議論するためにプログラムされていた。会議の 3 日目には、科学セッションと並行して教育ツアーが開催され、HPSCセンターを訪問した。

キーワード：国際栄養学会議、栄養の力、教育ツアー

Ⅰ　はじめに

2022年12月6日（火）～12月11日（日）までの6日間にわたり、東京国際フォーラム（東京都千代田区）で開催された第22回国際栄養学会議（22th International Congress of Nutrition, ICN2022）に参加した。国際栄養学会議は、国際栄養科学連合（International Union of Nutritional Sciences, IUNS）により4年に一度開催される国際会議である。国際栄養科学連合の目的は、栄養科学と食糧科学の専門家が集う国際栄養学会議の開催を通して、世界の全ての地域の社会の発展、人々の生活の質の向上、栄養と食品に関する諸課題の解決、そして健康福祉に貢献することである。関連分野の最先端の研究者が世界各国から集結し、最新の研究成果が発表される場となる。

日本では、1975年に京都市で開催された第10回国際栄養学会議についで、今回は47年ぶりの2回目の開催になる。当初は2021年9月に東京での開催が予定されていたが、COVID-19パンデミックの状況を考慮して1年延期となり、2022年12月の開催となった。

今回のICN2022は、「栄養の力：100億人の笑顔のために（THE POWER OF NUTRITION :FOR THE SMILES OF 10 BILLION PEOPLE）」をテーマとして日本学術会議、日本栄養・食糧学会及び日本栄養改善学会による共同主催であった。

Ⅱ　コングレス会場の様子

1　レセプションとオープニングセレモニー

受付は開始時間前から非常に多くの人が並んでいた（図1）。感染防止に配慮し、参加者は皆事前に登録したQRコードを用意し受付デスクに向かうシステムとなっていた。

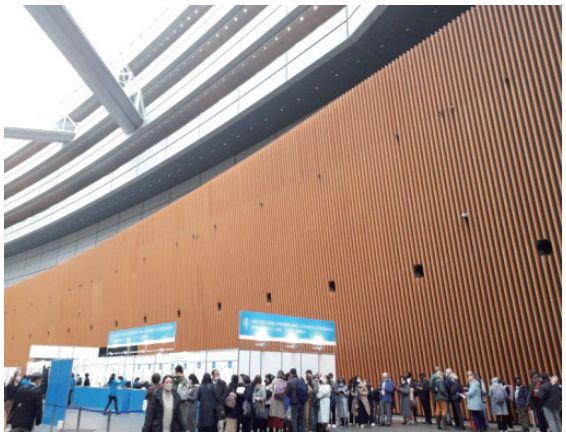

図1　受付会場の様子

[1]　健康科学部

開催期間中キッチンカー（図2）や周辺の飲食店で利用できるランチクーポンの配布も同様に行われていた。6日の開会式には、後藤茂之厚生労働大臣、小池百合子都知事等多くの来賓の出席があった。秋篠宮皇嗣妃殿下からの温かいメッセージも添えられた。

図2　ランチクーポン用キッチンカー

さらに加藤久則組織委員長開会のメッセージは、非常に印象深かった。「現在、世界は、食糧不足、栄養失調、人口増加、過栄養、食生活の多様化、食の安全への脅威、高齢化社会など、栄養に関するさまざまな問題に直面している。日本は、国民の創意工夫と柔軟性により、これらの問題を比較的短期間で解決し、さまざまな解決策を講じてきた。私たちの惑星の人口は、今世紀中に100億人に増加すると予測されている。栄養には、22世紀に向けて、今日を生きる人々、そして未来の世代に健康と幸せを提供する力がある。そこで、本会議のテーマを「栄養のチカラ ～100億人の笑顔のために～」に決定した。2022年に世界中の皆が東京に集まることで、栄養問題について貴重な議論ができることを願っている。また、2021年12月に開催された東京栄養サミットとの連携事業も検討しており、相乗効果が期待できる」という力強く熱いメッセージであった。

開会式に引き続きて、オープニングレクチャーとして、2018年ノーベル賞受賞者である本庄佑博士による「獲得免疫のセレンディピティ」と題した講演が行われた。もう1つのオープニングレクチャーは、WHOの事務局長補佐である山本直子博士による講演であった。世界の食料と栄養の環境が変化する中で、より健康的な人口を達成するために栄養学の貢献を掲げ圧巻の内容であった。オープニングレクチャーは、研究を進める上での示唆に富んだものであり会場からは惜しみない拍手が起こっていた（図3）。

図3　オープニングレクチャー会場

2　コングレスプログラム

プログラム[1]は、1．栄養研究の進歩、2．栄養素と栄養評価、3．ライフコースにおける栄養、4．栄養と疾病管理、5．食文化実践と栄養教育、6．公衆衛生の栄養と環境、7．機能性食品と生理活性化合物、8．農業・食品科学・安全、9．その他（地球規模の問題、課題、政策など）の分野を軸としたシンポジウム、口頭およびポスター発表が行われた。知識を更新するよい機会となった。今回の会議では、ポスター発表はパネルでは行わず、データによる掲示と討議のためのスペースが会場に用意されるというユニークな方法をとっていた。

3　おもてなしブース

会場では、12月10日午前中まで企業ブースの展示が行われ、新しい食品や新しい情報を提供していた。展示会場の一角では、海外からの参加者が水引やちぎり絵などの日本文化体験を行なっていた。また、海外からの参加者限定で、ショートトリップも企画されており、多くの方が会場周辺の魅力に触れられたようである。

Ⅲ　教育ツアーに参加して

会議期間の中日には、セッションと並行して教育ツアーが開催された。セミナー形式で認定制度について学び、実際に飲食店で「スマートミール」を体験できるヘルシーミール（スマートミール）セミナーツアー、②立川市の学校給食センターを訪問し、2 種類のキッチン（中央キッチンと個別の学校キッチン）を紹介し、学校の子供たちが給食を楽しんでいる教室を訪問する学校給食センター見学ツアー、③発酵料理の専門家と味噌醸造所の職人によるセミナーツアーなど多岐にわたり興味深い企画が用意された。

著者は、わが国の世界を舞台に活躍するアスリートのトレーニングやスポーツ科学・医学・情報による研究・支援の拠点となっているハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）[2] の見学ツアーに参加した。味の素ナショナルトレーニングセンター屋内トレーニングセンター・イースト（東館）では、トップアスリートの練習の様子やその能力の凄さを体感できる展示などをガイドによるツアー形式で見学を受け入れている。トップアスリートが記録した高さを体感できる展示をはじめ、大会時のユニフォームやトーチを展示している。アスリートが練習している様子を見学した後、選手が大会で使用しているさまざまな種類のラケットを見たり触ったりできる。またフォトスポットでは競泳プールの飛び込み台や本物の表彰台に乗って記念撮影も可能である。オリンピック・パラリンピックメダリストたちが競技を始めてからメダルを獲得するまでの過程（アスリートパスウェイ）をデータに基づいて紹介しているボードは興味深かった。パラリンピック競技の歴史やパラアスリートの世界記録の紹介だけではなく、医・科学サポートエリアでは、「形態と身体組成」「スポーツ栄養」「ストレングス＆コンディショニング」「スポーツバイオメカニクス」などの紹介があり連携の重要性を再確認した。

今回のツアーの目玉である競技者用レストランでは、参加者の興味は食事内容をすぐに評価できる栄養評価システム「mellon Ⅱ」に集中していた（図4）。

図4　独自の栄養評価システム

「料理を摂り過ぎた場合はどう対応するのか？食品ロスは発生しないのか？」、「選手から助言を求められた場合対応するのか？その場合チーム所属の管理栄養士とHPSCの管理栄養士でどのように連携しているのか？」等予定時間を過ぎてもなお海外の参加者から次々と質問がなされた（図5）。著者も今回視察したものを授業にフィードバックしたいと考えた。

図5　質問する参加者の様子

Ⅳ　レクチャー＆シンポジウム

興味深い講演やシンポジウムが盛りだくさんの6日間であった。印象に残った講義は、基調講演はでBarry M. Popkin 博士と齊藤正幸博士による肥満研究についての講義、特別講義ではライフコースを通した栄養と生涯の健康についての講義である。栄養疫学・方法論とその将来像についての総括講義も専門分野に関わるためか理解しやすい内容であった。

シンポジウムでは、スポーツ栄養に関する分野の発表者の熱意あふれるプレゼンテーションが続

いた。科学的知見やデータが少ない分野だけに研究者の取り組む姿勢に感銘を受けた。

最も印象に残っているのは、最終日の午前中のパネルディスカッションである。「COVID-19、各国の栄養」と題して、アメリカ、日本、インドネシア、タイの報告がなされた。特にアメリカでは、食品のポーションサイズが大きくなり、メタボリックシンドロームの増加が懸念されるようだ。同時進行のもう一つのテーマ「魚の消費とメンタルヘルス」にも興味があり途中参加した。オメガ3脂肪酸とうつやメンタルヘルスについて報告がなされた後、マリンプラスチック問題と魚食との関係や若い世代の魚離れについて、会場からも意見が出され白熱した討議がなされた。特に印象深いのはインドネシアやフィリピンといった日本の漁業とかかわりの深い参加者からは「和食＝日本食」に欠かすことのできない魚食の推奨を推進するべきとの意見が出ていたことである。開催国である日本の特徴ある食文化や取り組みについてのセッションの機会があったことは非常に有意義だと感じた。

V　おわりに

12月11日の閉会式では、本会議のフィードバックが行われ、今回の総参加者数は3,344名、地域別では日本が1,464名、アジアが691名、ヨーロッパが461名、北アメリカが346名、アフリカが224名、オセアニアが86名、南アメリカが52名の参加者であったことが報告された。初日の受付のための列に並んだおりに話した参加者はフィリピンの大学教授であった。食文化実践と栄養教育の分野の研究者でポスター発表者であった。つたない英語の著者の話を根気よく聞いてくれ、メールアドレスの交換を求めてくれた。教育ツアーやセッションで同席したアイスランドやモロッコからの参加者は皆フレンドリーでわずかな時間でも話しかけてくれ、来日を楽しんでいる様子であった。

国際会議への参加は、2013年7月20日から22日までの3日間、アメリカのシカゴでのIAHAIO（ヒトと動物の相互作用に関する国際会議）以来2度目であるが、今回は非常になまりのある英語が飛び交っていたように感じた。英語での会話への躊躇いが多少なりとも減り、国際会議・学会への参加のハードルが少し低くなったようにも思えた。閉会式で近くに座ったメキシコからの若い参加者は、25時間かけて来てまた同じ時間かけて帰るのだと話してくれた。時差ボケが激しく疲れたが、日本は好きだと言っていた。別れ際に彼女が言った言葉は「See you in Paris!」。

次回のICN2025はフランスのパリで開催される。再会が楽しみである。次回はポスター発表に挑戦したい。最後に、開催を成功させるため、会議運営に携わった組織委員会の方々と本当に丁寧な対応をいただいたボランティアの皆さんに感謝したい（図6）。

図6　会場案内板の前にて

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

参照

[1] 22nd Internatinal Congress of Nutrition in Tokyo, Japan, https://icn22.org/（2023年12月15日）
[2] Japan High Performance Sport Center, https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/（2023年12月15日）

SUMMARY

22nd International Congress of Nutrition（ICN 2022）Participation Report
ー Congress & HPSC Educational Tour ー

Yuko Shimazu

In this paper, we discuss the 22nd International Congress on Nutrition 22 report on participation. This year's ICN2022 was held under the theme of "THE POWER OF NUTRITION: FOR THE SMILES OF 10 BILLION PEOPLE." The special symposium was programmed to discuss the progress after the Tokyo Summit. On the third day of the congress, educational tours were held behind the scientific sessions and included visits to the HPSC（High Performance Sport Center）.

Keywords: Educational Tours, International Congress on Nutrition, Power of Nutrition